Eccrine Porocarcinoma

Bowen 病様外観を呈した
Eccrine Porocarcinoma の 1 例

村野 早苗*

Summary

An 82-year-old woman presented a 5.0×4.5cm, well-demarcated, partially brownish-black, erythematous plaque in the left abdomen of about 15 years' duration. There were slightly raised portions in the plaque. No apparent regional lymphadenopathies were present. Histologically the center of the plaque showed tumor cell nests invading into the dermis and connected with the epidermis. The tumor cells consisted of diastase-labile, CEA-negative, clear cytoplasm with large, atypical nuclei surrounded by peripheral basaloid cells. There were duct-like structures within the nests. The overlying epidermis also showed clear cell nests without atypical nuclei. The plaque was excised in toto with 1cm margins. There were no recurrences or metastasis 12 months later.

緒 言

Eccrine porocarcinoma (以下 EPC) は比較的稀な腫瘍であり、臨床的には結節ないし種瘤を形成することが多い¹⁾。今回、臨床的に Bowen 病を思わせる像を呈した EPC の 1 例を経験したので、報告する。

症 例

患 者：82歳，女性

既往歴：1982年，髄膜腫にて摘出術を受けた。

家族歴：特記すべきことなし。

現病歴：約15年前より，左下腹部に自覚症状のない皮疹があった。大きさ，性状の変化につ

いては不明である。

現 症：左下腹部に境界明瞭な4.0×5.5cmの淡赤褐色斑を1個認めた。斑の上方右側は不規則形の黒褐色斑で，その他の部分には灰褐色ないし淡褐色の鱗屑と皮面よりわずかに隆起した扁平丘疹がみられ，黒褐色斑の端には黒色の毛が1本認められた(図1)。浸潤はなく，両半径部のリンパ節は触知しなかった。臨床的に Bowen 病を疑い，斑の端から1cm以上離して切除した。

病理組織学的所見：標本の中央部では一部表皮と連続して腫瘍細胞が真皮内に蜂巣状に増殖している(図2)。構成細胞は，核仁のはっきりした大型の核を持つ胞体の明るい細胞で，一部には周辺に基底細胞様細胞が柵状に配列している部分もあり(図3)，大小不同，異型性が著明である。細胞集塊のなかには，管腔様構造が多く見られ，三日月状に圧排された核を認める

*Sanae MURANO：川崎製鉄健康保険組合千葉病院

(図4)。また、真皮内に、周辺と明らかに境された、管腔様構造の著明な細胞集塊が見られるが、細胞が壁を形成している明らかな管腔とは異なる。この周辺の間質は浮腫性であり、構成細胞にはやはり大小不同、異型性が見られる(図5)。

中央部の周辺では、表皮内に表皮細胞と明瞭に境された明るい細胞の集塊が多数存在するが、この部分を構成する細胞では大小不同異型性は著明ではない(図6)。

腫瘍構成細胞は、ジアスターゼ消化性、PAS陽性であった。また、S-100蛋白、CEAは陰性であった。

経過：術後12ヵ月を経過したが再発、転移は認められていない。

図1. 初診時の臨床像
境界明瞭な淡紅色斑でその上に鱗屑、
扁平丘疹を認める

図2. 病理組織所見
中央部では表皮と連続して、腫瘍細胞が蜂巢
状に真皮内に増殖している

図3. 一部に柵状配列を認める

図4. 腫瘍構成細胞は、大小不同、異型性が著明で、
管腔様構造が見られる

図5. 管腔様構造の著明な部分

図6. 腫瘍周辺の表皮内細胞集塊

考 案

EPC は比較的稀な腫瘍であり、本邦報告例の統計的事項は、麻生ら¹⁾、杉田ら²⁾が詳しく報告している。麻生らはそれらをまとめ、EPC は 1) 高齢者の、2) 下肢に発生することの多い、3) 結節状、潰瘍、びらん、表面顆粒状、花野菜状種瘤で、4) 転移性の悪性ポテンシャルを有する Acrosyringium 由来の悪性腫瘍と要約している。

EPC の臨床形態はやはり種瘤、結節、あるいは疣贅状と記載されているものがほとんどで、本症例のような Bowen 病を思わせる紅斑として記載されているものは、戸倉ら³⁾の 1 例のみであった。

本症例の組織学的所見をまとめてみると、表皮から連続して真皮内に浸潤して増殖する腫瘍で、核仁の明らかな明るい細胞から成り、大小不同、異型性の強い悪性腫瘍の所見を有し、管腔様構造をもつ。周辺では、表皮内に明るい細胞の集塊が表皮細胞と明瞭に区別されて存在し、Hidroacanthoma Simplex⁴⁾の像を呈する。すなわち、Hidroacanthoma Simplex より発生

し、浸潤性に増殖して行った EPC と考えられる。

EPC は、表皮内汗管方向への分化を示す腫瘍であるとする説²⁾が多いが、腫瘍細胞は CEA、S-100蛋白に陽性に染まることがその根拠の一つとされている。しかし、本症例のようにいずれも陰性の報告⁵⁾もみられ、免疫組織学的染色は、いまだ補助的な方法でしかないと思われる⁶⁾。

本症例は、髄膜腫の術後、痴呆が進行し、寝たきりでまた発語もほとんどみられない状態であったため、家族の希望もあり、生検を行わずボーエン病の診断のもとに手術を施行したが、術前に生検を行い確定診断をつけることの重要さを改めて認識させられた 1 例であった。

謝辞 英文 Summary を御校閲いただきました、愛媛大学皮膚科学教室、三木吉治教授に感謝いたします。

文 献

- 1) 麻生和雄, 吉川賢一, 穂積豊, 他: Pigmented Eccrine Porocarcinoma. 西日皮膚, 52: 933-941, 1990.
- 2) 杉田康志, 岡野伸二, 林雄三, 他: Eccrine Porocarcinoma の一例. 皮紀要, 86: 465-470, 1991.
- 3) 戸倉新樹, 松本吉郎: 表皮内汗管由来を思わせたボーエン病様腫瘍. 日皮会誌, 96: 1178, 1986.
- 4) Smith, J.L.S., Coburn, J.G. Hidroacanthoma Simplex. Br. J. Dermatol., 68: 400-418, 1956.
- 5) 金井貴子, 大井綱郎, 木村達郎: 分泌顆粒を認めた Eccrine Porocarcinoma の 1 例. 皮膚臨床, 32: 1201-1208, 1990.
- 6) 堤寛: 免疫組織化学. 臨床検査, 31: 1330-1342, 1987.